

# 江沅『説文積例・積音例』の初声について

——『説文解字音均表』との比較を中心にして——

白田真佐子

## 1. はじめに

諧声表について、『中国語学大辞典』は次のように定義している（同編委会1991, 140頁）。「諧声偏旁を一定の古音韻部の順序に拠って、同類に集め、配列してできた表。創始者は清代の段玉裁である。」（以下省略）その段玉裁の意向を受け、江沅が『説文解字音均表』を著わしたことは、『説文』研究者にはよく知られていることである。江沅は『説文解字音均表』の前に、まず『説文積例・積音例』<sup>1)</sup>を準備しており、段玉裁の『古十七部諧声表』（『六書音均表』卷二）、江沅『説文積例・積音例』、江沅『説文解字音均表』の三種を系統的に比較することは、諧声表研究の上で意義あることと言えよう。

段玉裁「古十七部諧声表」には許世瑛氏の研究（許1942）があり、江沅『説文解字音均表』については『江沅説文解字音均表攷正』（説文会1994）があり、諧声符自体の研究に関しての便利な資料となる。江沅『説文積例・積音例』についても林明波、黄麗麗、李新魁・麦耘の諸氏<sup>2)</sup>によってその概略を知ることが可能である。特に李氏の記述により『説文積例・積音例』の諧声表としての形式が分かる。但し、「古十七部諧声表」「説文積例・積音例」「説文解字音均表」の諧声符を比較対照した研究はまだ行なわれていない。（なお、以下、『説文解字音均表』は『音均表』、『説文積例・積音例』は『説文積例』または単に『積例』と略すこともある。）

筆者はかねてから、諧声表の系統づけを試み、特に諧声符の配列を問題にしてきた<sup>3)</sup>。上記の三種の諧声表の諧声符を部ごとに並べ、配列を調べてみると、ある諧声符は三種すべてに現れるが、別の諧声符はある一つの諧声表にのみ現れる等々の現象に気づいた。配列について論じる前に、まず、諧声符の数とそ

の内容について明らかにする必要がある。

三種の諧声表を一度に比較するのは煩瑣であるので、今回は『説文解字音均表』と『説文釈例』を取り上げることにする。将来のことを考え、『説文解字音均表』を基準とし、諧声符の面からあまり研究の進展のしていない『説文釈例』を調べていく。この『説文釈例』を見てみると、初声ごとに改行し、二声、三声……も記している。初声を明確にする方針は『説文解字音均表』で突然始まったのではなく、『説文釈例』にその下地のあったことが分かる。そこで、『説文釈例』と『説文解字音均表』の諧声符、特にその初声に重点をおいて、比べていくことにしたい。

## 2. 『説文釈例』と『説文解字音均表』の初声の比較方法

『説文解字音均表』の初声は『江沅説文解字音均表攷正』により「A」を採り、『説文釈例』では初声分かりやすく示してあるのでその諧声符を初声とする。初声の合計は『説文解字音均表』では1288、『説文釈例』では1294となり、数の上では『説文釈例』の方が6例多い（今回は、『説文解字音均表』と『説文釈例』それぞれの十七巻末にある「闕音」は、原則として諧声符の数に含まない）。これらの初声の諧声符を一つ一つ比べていく訳であるが、比較の結果は、いくつかのタイプに分けて初声の数で示し、必要があれば、実例を示す。『説文解字音均表』の初声に『説文釈例』の初声を対照させた表そのものは、今回は載せない。分量が多いということ、スペースがあれば、「古十七部諧声表」も合わせた対照表を示したほうが有用であるからである。

諧声符の番号は『江沅説文解字音均表攷正』による。そのため、『説文解字音均表』は皇清経解続編本によることになるが、『江沅説文解字音均表攷正』は清稿本の初声との校合も経ているので、特に問題はないと思われる。『説文釈例』は『小学類編』所収本により、初声の通し番号を各部ごとに付け、それを用いる<sup>4)</sup>。簡略化のため、初声にaは付けず、二声以下にb, c…と付けていく。初声の部分に誤刻等があるので、それらは校正しておいた<sup>5)</sup>。比較の際は初声が中心となるが、必要があれば二声以下も見ることとする。

なお、『説文解字音均表』は諧声符を示すのに○音を用い、一方『説文釈例』

江沅『説文釈例・釈音例』の初声について

は○声を用いるが、それはそのままとし、両者の区別にも役立てたい。また、古音の部は単に「部」と言ったり、「第○部」と記すこともある。

3. 初声が同一部内で1対1の対応をする例

『説文釈例』の初声を『説文解字音均表』の初声と比較すると、同一部内で、それぞれの初声と対応する例が大部分を占める（以下、「同部1対1」ということもある）。（例）第1部『説文解字音均表』0001A絲音——『説文釈例』1絲音（『説文解字音均表』の初声にはAを記すが、『説文釈例』の初声にはaを付けない。）

この同部1対1の数を表に示すと、以下のようになる。

	初声の合計	同部1対1	割合
『音均表』	1288	1108	86.0%
『釈例』	1294	1108	85.6%

1対1の対応の例は、『説文解字音均表』『説文釈例』それぞれにおいて86.0%、85.6%を占める。つまり、『説文解字音均表』の初声のうち86.0%は、『説文釈例』の初声をそのまま同一部内で継承していることになる。

次に、各部ごとに『説文解字音均表』『説文釈例』それぞれの初声の数と、同部1対1の数を示す。実例をすべて挙げるのはスペース上無理であるので、以下のような表としたい。

部	『音均表』	『説文釈例』	同部1対1
1	93	98	81
2	72	69	62
3	133	133	109
4	41	40	39
5	116	114	92
6	24	23	19
7	65	56	53
8	45	41	35
9	37	43	33

10	54	60	46
11	33	36	30
12	74	77	65
13	69	67	64
14	123	129	117
15	211	208	175
16	59	63	54
17	39	37	34
合計	1288	1294	1108

なお、以下のような例も同部1対1に含める。

部	『音均表』	『釈例』
3	0190A 隴音	26 焦音
	0247A 鷓音	15 焮音
5	0360A 与音	18 與音

上の3例において、『説文解字音均表』に対応する『説文釈例』の初声は、『説文解字音均表』ではすべて二声である。

#### 4. 初声が同一部内で1対1の対応をしない例

同一部内で1対1の対応をしない例として、『説文解字音均表』に180、『説文釈例』に186の初声がある。これらは次の5つの場合に分かれる。「」内は略称である。

- ① 異なる部で初声が1対1の対応をするもの。「異部1対1」
- ② ある一つの初声に対応する初声がないもの。但し、『説文解字音均表』の初声に対応するものが『説文釈例』にない場合のみしかない。「1対ゼロ」
- ③ ある一つの初声に対して、複数の初声に対応するもの。「1対複数」
- ④ ある一つの初声に対して、二声以下などが対応するもの。「初声対二声等」
- ⑤ 『説文解字音均表』や『説文釈例』での両見に関係するもの。「両見」

江沅『説文積例・積音例』の初声について

上記の③と④は更に二分できるが、内容は後述し、初声の数のみ表に示しておく。その表には他の場合も初声のみ記すので、対応する初声のない場合や二声以下の場合、数を示さない。なお、③(1)、(2)の実例はそれぞれ68例、3例であり、⑤の実例は27例、他は初声の数が実例の数となり、合計199例となる。以下に表を掲げることにする。

	『音均表』	『積例』
①	11	11
②	66	—
③ (1)	68	148
(2)	6	4
④ (1)	20	—
(2)	—	4
小計	171	167
⑤	9	19
合計	180	186

以下、①から④の内容を述べ、⑤については第5節を充てる。

#### 4.1 異部1対1

異なる部で、『説文解字音均表』と『説文積例』の初声が1対1の対応をするものが、11例ある。以下に、『説文解字音均表』の部を基準にし、表の形で11例を示す。

部	『音均表』	部	『積例』
1	0016A 冂音	3	41冂声 <sup>6)</sup>
	0092A 冂音	6	23冂声
	0093A 等音	6	20等声
3	0202A 爪音	2	47爪声
	0207A 孔音	4	38孔声
8	0552A 彡音	16	60彡声 <sup>7)</sup>
11	0711A 鮮音	14	108鮮声

12	0727A 便音	11	34 便声
13	0794A 班音	14	78 班声
	0852A 桴音	12	63 桴声 <sup>8)</sup>
15	0911A 妥音	17	36 妥声 <sup>9)</sup>

#### 4.2 1対ゼロ

『説文解字音均表』のある一つの初声に対して、それに対応する『説文釈例』の初声が存在しないことがある。しかも、同部や異部で、二声以下を見ても、対応する諧声符がない。これが「1対ゼロ」である。例えば、『説文釈例』第2部には「10天声」があり、その注に「無笑」とあるように、「笑声」は存在しないのである（因みに、段玉裁の「古十七部諧声表」にも「笑声」はない）。以下に、「1対ゼロ」の66例を古音の部ごとに示す。

部	『音均表』		
2	0102A 梟音	0104A 笑音	0125A 堯音
	0129A 休音	0132A 鼎音	0161A 駮音
	0163A 翟音	0164A 芦音	
3	0167A 馗音	0171A 汙音	0261A 玉音
	0262A 珣音	0275A 髟音	0288A 孛音
	0297A 莘音	0298A 粟音	
4	0339A 邁音		
5	0344A 兔音	0346A 茱音	0352A 髀音
	0370A 暮音	0373A 莽音	0391A 伎音
	0437A 爽音	0439A 赫音	
6	0457A 蠅音	0471A 登音	0472A 癩音
	0475A 再音		
7	0486A 脣音	0512A 𪔐音	0517A 𪔑音
	0520A 協音	0521A 𪔒音	0522A 協音
	0544A 𪔓音		
8	0548A 𪔔音	0549A 𪔕音	0550A 𪔖音
	0556A 𪔗音	0566A 𪔘音	0578A 𪔙音

江沅『説文釈例・釈音例』の初声について

	0589A	口音				
9	0599A	膏音	0607A	共音		
10	0669A	匠音				
12	0729A	脣音				
13	0829A	朕音	0846A	鰥音		
14	0906A	殞音	0946A	媿音		
15	0985A	致音	0986A	兕音	1043A	擗音 <sup>10)</sup>
	1052A	柔音	1056A	市音	1064A	喜音
	1087A	少音	1099A	轍音	1100A	灑音
	1105A	奪音	1117A	凶音	1124A	竄音
	1126A	啟音				
17	1275A	科音	1286A	羈音		

以上の「1対ゼロ」は、『説文釈例』の段階では存在しなかった初声は、『説文解字音均表』に至って増補された場合である。

#### 4.3 1対複数

(1) 『説文解字音均表』のある一つの初声に対して、『説文釈例』の初声が複数対応することがある。『説文解字音均表』の初声は68例、これに関係する『説文釈例』の初声は148ある。この例は、すべて同一部内であり、次のような3通りの場合がある。

【1対2】『説文解字音均表』のある一つの初声に対して、『説文釈例』の初声が2つ対応する場合がある。全57例。これに関係する『説文釈例』の初声は114。(例) 第1部 『説文解字音均表』0001A 絲音——『説文釈例』1 絲声・18 玆声 『説文釈例』の玆声は『説文解字音均表』では0001B、つまり二声になっている。

【1対3】『説文解字音均表』のある一つの初声に対して『説文釈例』の初声が3つ対応する例もある。全10例。これに関係する『説文釈例』の初声は30。(例) 第1部 『説文解字音均表』0010A 又音——『説文釈例』10 又声・11 尤声・17 友声 『説文釈例』の尤声は『説文解字音均表』では0010F、つまり六声である。『説文釈例』の友声は『説文解字音均表』0010A 又音の所属字と

なっている。

【1対4】『説文解字音均表』のある一つの初声に対して、『説文釈例』の初声は4つ対応する例は1例、これに関係する『説文釈例』の初声は4ある。なお、『説文釈例』の初声は5つ以上対応するものは見られない。第3部『説文解字音均表』0254A肉音——『説文釈例』90肉声・56彘声・92育声・116繇声『説文釈例』の彘声・育声・繇声は『説文解字音均表』ではそれぞれ肉音の四声・五声・三声である。

以上の例について、各部ごとに初声の数を表としてまとめておきたい。なお、1対2、1対3、1対4の数は、『説文解字音均表』の初声の数に一致するが、それぞれ2倍、3倍、4倍すれば『説文釈例』の初声の数となる。

部	『音均表』	『釈例』	1対2	1対3	1対4
1	7	16	5	2	—
2	2	5	1	1	—
3	10	22	9	—	1
4	—	—	—	—	—
5	9	19	8	1	—
6	1	2	1	—	—
7	1	2	1	—	—
8	2	4	2	—	—
9	2	5	1	1	—
10	5	12	3	2	—
11	2	4	2	—	—
12	5	10	5	—	—
13	1	2	1	—	—
14	4	8	4	—	—
15	13	28	11	2	—
16	3	7	2	1	—
17	1	2	1	—	—

(2) その他、逆に、『説文釈例』のある一つの初声に対して、『説文解字音



江沅『説文釈例・釈音例』の初声について

均表』の初声が複数対応することもある。これは3例（『説文釈例』の初声の数は4）、これに関係する『説文解字音均表』の初声は6となる。すべて同一部内である。

部	『釈例』	『音均表』
5	111殳声	0451A 殳音 0452A 股音
3	58由声	0223A 褒音 0224A 由音

『説文解字音均表』の殳音・股音にそのまま対応する初声は『説文釈例』にないのであるが、『説文釈例』の殳声が相当するとみなした<sup>11)</sup>。また、『説文釈例』では由声に「褒」が所属字として見える。

また、次の表のような特殊な場合もある。

部	『釈例』	『音均表』
5	1且声 105盧声	0340A 且音 0341A 俎音

『説文釈例』では、俎は且声の所属字。また、『説文釈例』の盧声は『説文解字音均表』では三声（0340C）であり、対応が些か複雑である。従って、『説文釈例』の且声と『説文解字音均表』の且声を同部1対1とせず、上表の4つの諧声符で一例とみなすことにする。

#### 4.4 初声対二声等

『説文解字音均表』『説文釈例』のいずれかの一つの初声が、相手方の諧声符の二声以下（あるいはその所属字）と対応することがある。これは同一部内の場合もあり、また、異なる部の間もあり、以下の2通りに分類できる。なお、初声と二声以下が対応する場合でも、両見に関係する場合は、第5節で取り上げる。

(1) 同一部内で、『説文解字音均表』のある一つの初声が『説文釈例』の二声以下の諧声符一つと対応する。全20例。

部	『音均表』	『釈例』
1	0006A 其音	6 丌声      b 其声

	0036A 憲音	41直声	b 憲声
3	0196A 詹音	32酉声	b 詹声
	0206A 冏音	41冏声	b 冏声
5	0358A 瓜音	16各声	b 瓜声
	0361A 舛音	18與声 <sup>12)</sup>	c 舛声
	0413A 夔音	70隻声	b 夔声
7	0485A 牟音	6 羊声	c 牟声
	0509A 合音	29亼声	b 合声 <sup>13)</sup>
	0510A 獸音	25夨声	b 獸声
	0511A 聃音	25夨声	d 聃声
10	0643A 強音	17薑声	c 強声
	0653A 璽音	26亡声	f 璽声
12	0772A 晉音	61珽声	b 晉声
15	0999A 回音	20口声	b 回声
	1029A 死音	51夕声	b 死声
	1073A 乂音	92丩声	c 乂声
	1089A 癸音	107夂声	b 癸声
	1092A 丩音	109丩声	b 丩声
	1113A 配音	127妃声	b 配声

(2) 『説文釈例』のある一つの初声が『説文解字音均表』の二声以下の諧声符(またはその所属字)に対応する場合もある。全4例。同一部内の場合の例は2例、次の通りである。

部	『釈例』	『音均表』	
7	25夨声	0509A 合音	C 夨音
8	6 詹声	0552A 夂音	B 詹音

異部間の場合は2例、次の通りである。

部	『釈例』	部	『音均表』	
9	42匊声	3	0252A 竹音	C 籀音
11	33香声	1	0022A 不音	C 否音

江沅『説文積例・積音例』の初声について

前者の場合、𦉳は『説文解字音均表』によると、籀音（竹音の三声）の所属字。『説文積例』では竹声は第3部（88番）であるが、𦉳声はない。第9部𦉳声の注に「三部転此。」とある。また、後者の場合、𦉳は『説文解字音均表』で否音（不音の三声）の所属字である。『説文積例』では不声は第1部（27番）であるが、𦉳声はない。第11部𦉳声の注に、「許否省声，誤。此当非一部之音也。」とある。

5. 両見に関係する例

初声が同一部内で1対1の対応をしない例の最後として、両見に関係する例を取り上げる。この例は3つの場合に分類することができ、2番目は更に三分される。以下にそれぞれの場合の諧声符の数を表の形で示す。その他の実質は3例、全部で27例となる。

	『音均表』	『積例』
(1) 『説文解字音均表』の両見	6	—
(2) 『説文積例』の両見	—	18
(3) その他	3	1
小計	9	19

(1) 『説文解字音均表』の両見

以下の6つの初声は、『説文解字音均表』の両見に関係する例である。[第4部] 鼻音 [第12部] 次音 [第15部] 卉音・𦉳音・𦉳音 [第17部] 萑音 以上の部に所属する場合を㊤とすると、これらの初声は『説文解字音均表』の別の部㊤で、初声（あるいは二声以下の諧声符）として両見する。『説文解字音均表』㊤と『説文積例』とは同部なので、こちらが同部1対1となり、第3節ですでに数に含まれている。但し、『説文積例』の「次声」のみ、4.3節の1対2の例である。つまり、『説文解字音均表』1039A「二音」に対して、同部の『説文積例』の二つの諧声符（61「二声」・45次声）が対応している。この「二音」「二声」は、諧声符が「二」であり、両者とも初声である。以上の6例については、以下の表を参照されたい。

部	『音均表』④	部	『音均表』⑤	『积例』
4	0338A 鼻音	3	0293A 鼻音	130 鼻声
12	0787A 次音	15	1039C 次音	45 次声
15	1097A 卉音	13	0802A 卉音	13 卉声
15	1160A 叡音	14	0944A 睿音	92 睿声 <sup>14)</sup>
15	1189A 丙音	7	0502A 丙音	22 丙声
17	1288A 萑音	14	0947A 萑音	94 萑声

(2) 『説文积例』の両見

以下の18の初声は、『説文积例』の両見に関係する場合である。[第1部] 騰声 [第2部] 本声 [第8部] 籥声 [第9部] 升声・芻声・彤声・顛声 [第10部] 弭声・夢声 [第12部] 蔑声 [第13部] 隼声 [第14部] 𠵽声・𠵽声 [第15部] 衆声・𠵽声・唄声・邳声・闕声 以上の部に所属する場合を④とすると、これらの初声は『説文积例』の別の部⑤で、初声、二声以下の諧声符、初声（または二声以下）の所属字として両見する。これらを3つの場合に分け、表を示していくことにしたい。

(i) 『説文积例』④の初声が『説文积例』⑤でも初声として両見している場合がある。『説文积例』⑤の古音の部と『説文解字音均表』の部が同一なので、こちらが同一部内の1対1の対応となり、『説文积例』④には対応するものがない形となっている。但し、『説文积例』の弭声は、『説文解字音均表』の番号は1308Aであるが、今回は闕音を除く方針を採っているため、同部1対1の例には含まれない。以下、全5例を表にまとめてみよう。

部	『积例』④	部	『积例』⑤	『音均表』
2	61 本声	3	16 本声	0181A 本音
9	19 升声	3	124 升声	0269A 升音
10	55 弭声		(闕音)	(闕音)
14	91 𠵽声	15	20 𠵽声	1186A 𠵽音
15	12 衆声	8	26 衆声	0574A 衆音

(ii) 『説文积例』④の初声が、『説文积例』⑤の二声以下の諧声符と対応する場合もある。一方、『説文积例』⑤の初声は、同一部内の『説文解字音均表』

江沅『説文釈例・釈音例』の初声について

の初声と対応する。つまり、同一部内の1対1の対応となっている。以下、全3例を表にして掲げる。

部	『釈例』④	部	『釈例』⑤	『音均表』
10	59夢声	6	1瞢声 c 夢声	0456A瞢音 C 夢音
12	62蔑声	15	155苜声 b 蔑声	1141A苜声 B 蔑音
13	55隼声	15	22佳声 g 隼声	1001A佳音 C 隼音

(iii) 『説文釈例』④では初声であるが、その文字が『説文釈例』⑤では初声（または二声以下）の所属字となっている場合もある。『説文釈例』⑤の初声は同一部内で『説文解字音均表』の初声と1対1の対応をする。但し、『説文釈例』⑤では、菴は五声の所属字、籛・邛・闕は二声の所属字である。以下、全10例を表にまとめてみる。

部	『釈例』④	部	『釈例』⑤	『音均表』
1	93騰声	6	5弁声	0461A弁音 <sup>15)</sup>
8	35籛声	15	49尒声	1026A尒音 <sup>16)</sup>
9	38芻声	3	106豕声	0270A豕音
	40彤声	7	7彡声	0487A彡音
	41顛声	4	4禺声	0302A禺音
14	129挽声	13	10免声	0799A免音
15	203菴声	14	87允声	0940A允音 <sup>17)</sup>
	205喞声	13	32盥声	0822A盥音
	206邛声	1	27不声	0022A不音
	208闕声	5	17烏声	0359A烏音 <sup>18)</sup>

(3) その他

その他、両見に関係する例で、以上の分類には入れにくい場合が3例ある<sup>19)</sup>。

まず、『説文解字音均表』の一つの初声に、『説文釈例』の別部の初声（または二声以下の諧声符）の所属字が対応する場合で、これに『説文解字音均表』

の所属字の両見が関係している。全2例。

部	『音均表』	部	『釈例』
17	1287A 𠂔音		
1	0011A 而音	1	12 而声

第1例として、𠂔は『説文解字音均表』では𠂔音と而音に両見するが、『説文釈例』では而声の所属字であり、「此字音転在十七部。」との注がある。但し、𠂔音は第17部、而声は第1部で別部。一方、『説文解字音均表』の而音と『説文釈例』の而声とは、初声の同部1対1の対応であり、第3節で数えてある。

部	『音均表』	部	『釈例』
16	1198A 𠂔音		
14	0889A 𠂔音	14	34 𠂔声
	B 単音		c 単声

第2例として、𠂔は『説文解字音均表』では𠂔音と単音に両見するが、『説文釈例』では𠂔は単声（𠂔声の三声）の所属字である。但し、𠂔音は第16部、𠂔声は第14部で別部。一方、『説文解字音均表』の𠂔音と『説文釈例』の𠂔声とは、初声の同部1対1の対応であり、第3節に含まれている。

次に、『説文解字音均表』において初声が異部で両見、『説文釈例』においても初声とその所属字が異部で両見という場合がある。

部	『音均表』	『釈例』
12	0785A 由音	76 由声
16	1249A 由音	63 細声

『説文解字音均表』では由音が両見し、それに伴ってその所属字「細」も両見している。一方、『説文釈例』では第12部由声の所属字に細（注は「又入十五部。」）があるほか、第16部に細声（注は「十二部転入此。」）がある。第12部では『説文解字音均表』と『説文釈例』は初声が同部1対1の対応をする。第16部は由音と細声が対応するが、これは両見に関係する例とみなされる。

## 6. おわりに

以上、『説文釈例』の初声を『説文解字音均表』の初声と比較してきたが、こ

ここでその結果をまとめておきたい。

同一部内で1対1の対応をする例が1108あり、『説文解字音均表』『説文釈例』のそれぞれ86.0%、85.6%を占めている。これは初声という点から見ると、『説文解字音均表』の基礎が86%『説文釈例』の段階において完成していること示している。

逆に、同一部内で1対1の対応をしない例が『説文解字音均表』に180、『説文釈例』に186あるということは、『説文釈例』から『説文解字音均表』への編纂過程で生じた問題を提示しているといつてよい。『説文釈例』にはなく『説文解字音均表』にある初声は全66という点は、『説文釈例』と『説文解字音均表』の初声が大部分一致している反面、『説文解字音均表』で増補された初声もあることを示している。この66の差にもかかわらず、『説文解字音均表』180、『説文釈例』186と6の差しかないのは、『説文釈例』の初声が『説文解字音均表』では二声以下になっている場合が $148 - 68 = 80$ あることが、一つの大きな要因である。68という数は、1対複数の(1)の『説文解字音均表』の初声の数であり、『説文釈例』の初声はそれより80多いことになる。そのほか、同一部内で1対1の対応をしない例には、初声と二声等の対応もあり、『説文釈例』から『説文解字音均表』への編纂過程には二声以下の決定も問題となったことが知られる。

異なる部で1対1の対応をする場合や、両見に関係する場合は、諧声符の所属が一つの部に決めにくいことがあることを示す。段玉裁は「古諧声説」(『六書音均表』巻一)を提唱し、ある一つの諧声符は必ず一つの部に所属すると仮定している。ところが、江沅『説文解字音均表』で一つの諧声符が二つの部に両見することが多く、それは「両見リスト」(説文会1994巻末)で一目瞭然である。今回、論文の目的により、『説文釈例』での両見をすべて調べたわけではないが、第5節にいくつか例が挙がっている。

本稿は『説文釈例』と『説文解字音均表』との初声の比較を試みたが、機会があれば、これをもとに『説文釈例』と『説文解字音均表』の二声以下の諧声符や、全体の諧声符の配列、また、段玉裁の「古十七部諧声表」との関連等について一考するのも興味深い。

注

- 1) 江沅『説文積例』は全二巻，上巻は「積字例」。下巻は「積音例」で諧声表となっている。
- 2) 林1964, 154—155頁。黄1992, 583—588頁，特に584頁。李・麦1993, 72頁。なお，諧声表の異同比較には，『古韻通曉』（陳・何1987）第二章「諧声異同比較」が役立つが，残念ながら，江沅『説文解字音均表』『説文積例』は含まれていない。
- 3) 臼田1994は，拙稿1988等も含んだその時点までのまとめである。
- 4) 諧声符の配列について今回は言及しないが，『説文解字音均表』（皇清経解統編本）と『説文積例』の諧声符の配列はほぼ一致する。
- 5) 初声に相当する文字が脱落していたり，誤刻であったりする場合について，校正したものを古音の部，諧声符の番号とともに次に列挙する。[第5部] 23ㄥ声 [第7部] 6羊声・31彙声 [第8部] 18曩声 [第9部] 38芻声・41頤声 [第13部] 64ㄥ声 [第17部] 26禾声（付）第10部の15番は庚声と同じ。なお，諧声符に用いられている文字は，印刷の都合上通行の字体に改めることがある。また，必要がある場合は，旧字体を用いることもある。
- 6) 『説文積例』第3部に「41ㄥ声 bㄥ声 c冒声」があり，『説文解字音均表』第1部には「0016Aㄥ音」，第3部には「0206Aㄥ音 B冒音」があり，錯綜している。『説文解字音均表』のㄥ音については，本稿4.4節（1）を参照。
- 7) ㄥ声については4.4節（2）の詹声参照。
- 8) 『説文積例』第1部にもㄥ声（4來声の二声）が見え，また，『説文解字音均表』第1部にもㄥ（0003A來音の所属字）がある。
- 9) 『説文積例』第15部には緩声（12衆声の三声）が見え，「妥『説文』所無，而音当在十七部，与十五部最近。」という注がある。
- 10) 擗は『説文解字音均表』第15部で初声（1043A擗音）として，また，別の二声（1097B奉音）の所属字として両見する。その1097Aは弁音で，『説文積例』では第13部に13弁声があり，「此字在十五部，而弁声者多入十三部，此合音也。」と注記されているが，擗声は挙げられていない。また，『説文積例』第15部には弁声（113ㄥ声の二声）はあるが，擗声がないので，『説文積例』には擗声がないと判断できる。
- 11) ㄥ声は『説文積例』第4部（8几声の二声）にも両見し，「殺・股入五部，此四部・五部合音也。」という注も見える。
- 12) 『説文積例』では「與声 與声」と同一箇所重複しているので，これをまとめて一つとし，昇声を三声とみなした。
- 13) 『説文解字音均表』では0509A合音，0510A馱音，0511A昇音であり，『説文積例』では25弁声（bが馱声，dが昇声），29ㄥ声（bが合声）となり，錯綜している。4.4節（2）も参照。



江沅『説文釈例・釈音例』の初声について

- 14) 睿は叡の重文。『説文釈例』第14部に、「此亦十五部，而睿声者多十四部。」(92睿声の注)とあるが，第15部に睿声はない。
- 15) 臙音は『説文解字音均表』では三声(0461C)。
- 16) 尗は『説文解字音均表』では第7部(0532A入音)にも両見している。
- 17) 菴は『説文解字音均表』では三声(0940C俊音)の所属字。
- 18) 闕は『説文解字音均表』では二声(0359B於音)の所属字。
- 19) ここで数に入れる初声は『説文解字音均表』の𪛗音・𪛘音・𪛙音の3と，『説文釈例』の細声の1である。第5節冒頭の表中の(3)参照。

<参考文献>

- 段玉裁『説文解字注』三十卷，『六書音均表』五卷。経韵楼本(上海古籍出版社，1981年影印)。
- 江沅『説文釈例』二卷。『小学類編』所収本(台湾：華文書局，1970年影印)。
- 江沅『説文解字音均表』十七卷。清代稿本百種彙刊本(台湾：文海出版社，1974年影印)。皇清経解統編本(台湾：藝文印書館，1965年影印)。
- 陳復華・何九盈1987.『古韻通曉』，中国社会科学出版社。
- 黄麗麗1992.「江沅」，『中国古代語言学家評伝』(吉常宏・王佩増編)，山東教育出版社，583—588頁。
- 李新魁・麦耘1993.『韻学古籍述要』，陝西人民出版社。
- 林明波1964.『清代許学考』(嘉新水泥公司文化基金会叢書研究論文第二十八種)。台湾：嘉新水泥公司文化基金会。
- 説文会(編)1994.『江沅説文解字音均表攷正』。(お茶の水女子大学中国文学研究室内)
- 許世瑛1942.「段玉裁古十七部諧声表補正」，『国立北京大学論文集(三十一年度)』，1—60頁。
- 『中国語言学大辞典』編委会1991.『中国語言学大辞典』，江西教育出版社。
- 白田1988.「諧声符配列法の原型とその変型」，『中国語学』，第235号，1—14頁。
- 1994.「論古音学与諧声表」，『語言研究』1994年増刊，492—493頁。